

VELC Test[®] の概要とよくある質問

Listening Section Part 2
の作問意図と項目特性

静 哲人
(大東文化大学)

よくいただく質問:

「4つ目の空欄に入る語を答える、というリスニングセクションパート2は、大変に難しいように思えます」

(推測される言外の意味?)

→ うちの多くの学生には難しすぎて、ほとんどみな正解できず、結果的に「ダンゴ状態」になってしまい、クラス分けに役に立たないのではないか?

リスニングセクションパート2とは

<音声>

- *Cooking is a wonderful hobby because you can eat what you create.*

• <印刷>

- Cooking is a wonderful hobby ()()()
(*) ...

A. can't B. watch C. neat D. eat

おそらく疑問のポイントは

- なぜ4つめの空欄を問うのか？

ディクテーションにおける burst (= 一気に読まれるフレーズの長さ)

- Has one of the longest history as a testing-technique (Stansfield, 1985)
- One desirable technique for testing listening (Hughes, 2003; 若林・根岸, 1993; 根岸, 1993; Cohen, 1994; Bailey, 1998)
- “Breaks should be spaced far enough apart to challenge the limits of the short term memory of the learners and to force a deeper level of processing than mere phonetic echoing.” (Oller, 1979: 273)
- Partial dictation is preferred for ease of scoring (Hughes, 2003).

“Breaks should be spaced far enough apart”

<Too Close>

... it was / impossible / to connect / the dots /
looking forward / when I was / in college, / but
it was / very, very clear / looking backwards / 10
years / later. /

<Challenging>

... it was impossible to connect the dots /
looking forward when I was in college, / but it
was very, very clear looking backwards / 10
years later. /

つまり

- より深い部分の「英語力」を測定するには、単なる音の hearing を超えて、意味を理解する listening に関わるよう、ワーキングメモリ(短期記憶)に負荷がかかるテストタスクが必要。
- L1であれば、かなり長い文でも、その気になればリピートできる = ワーキングメモリ内の音韻ループでなんども回せるから = 意味も構文も理解できているから
- L2の場合、どの程度の長さとレベルのフレーズを音韻ループ内で回していただけるか = L2熟達度

実験

(*)にあたる部分の語を答えて下さい。🔊

【1】 Some viruses (*)()()()()
()()()()().

【2】 Some viruses ()()()(*)()
()()()()().

【3】 Some viruses ()()()()()()
()(*)()().

空欄の位置が印刷してある語の

- 直後だと、予測もたってしまうし、単なる hearing で答えられてしまう。
- あまりにも後ろのほうにあると、指折り単語の数を数えるほうに認知資源を取られてしまう。
- 空欄の位置は、3つめ、4つめ、5つめ、などをトライアル段階で試し、項目の振る舞いの成績が良かった4つめが最良と判断し、決定しました。

「数え間違いによる誤答」 を防ぐ工夫



- 【2】 Some viruses () () () (*) ()
() () () () ().

選択肢セット1

twenty

any

adapted

adopt

選択肢セット2

adapt

to

environment

any

「数え間違いによる誤答」 を防ぐ工夫

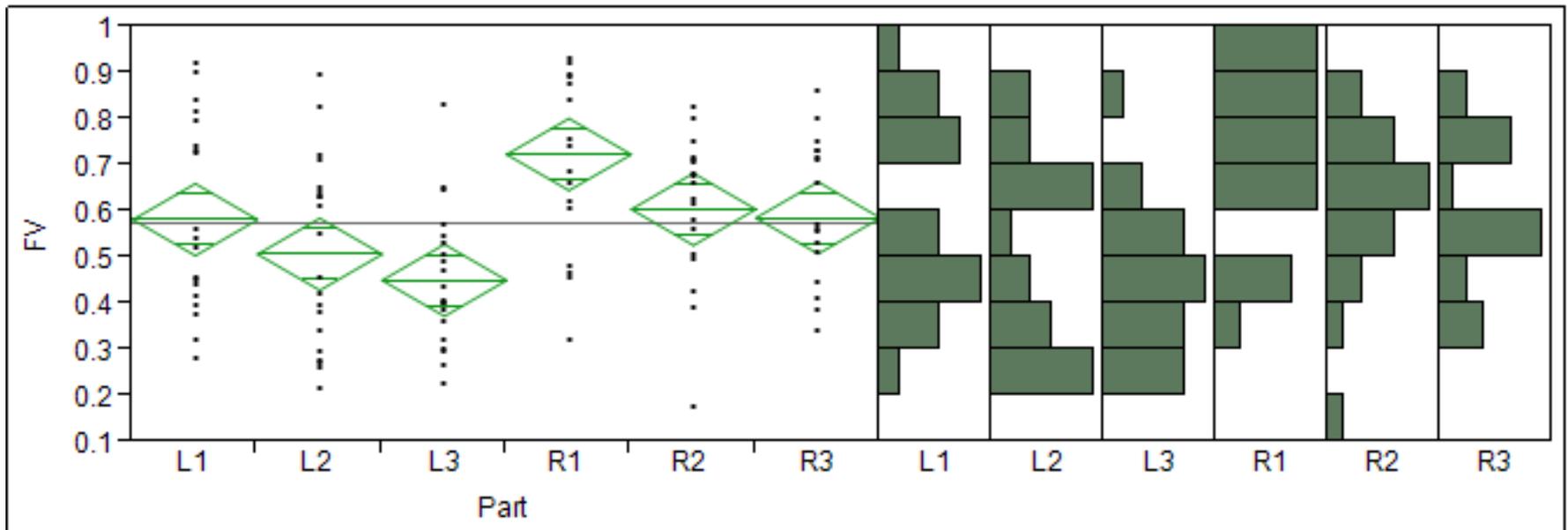
- 刺激文に使われている語は、誤答選択肢として使わない。
- 誤答選択肢は、実際には刺激文には出てこない、目標語あるいはその前後の音声に似た音声イメージの語に限る。
- Some viruses (can) (adapt) (to) (*any) (environment) (and) (infect) (people) (with) (diseases).
(A) twenty (B) any (C) adapted (D) adopt

ご回答

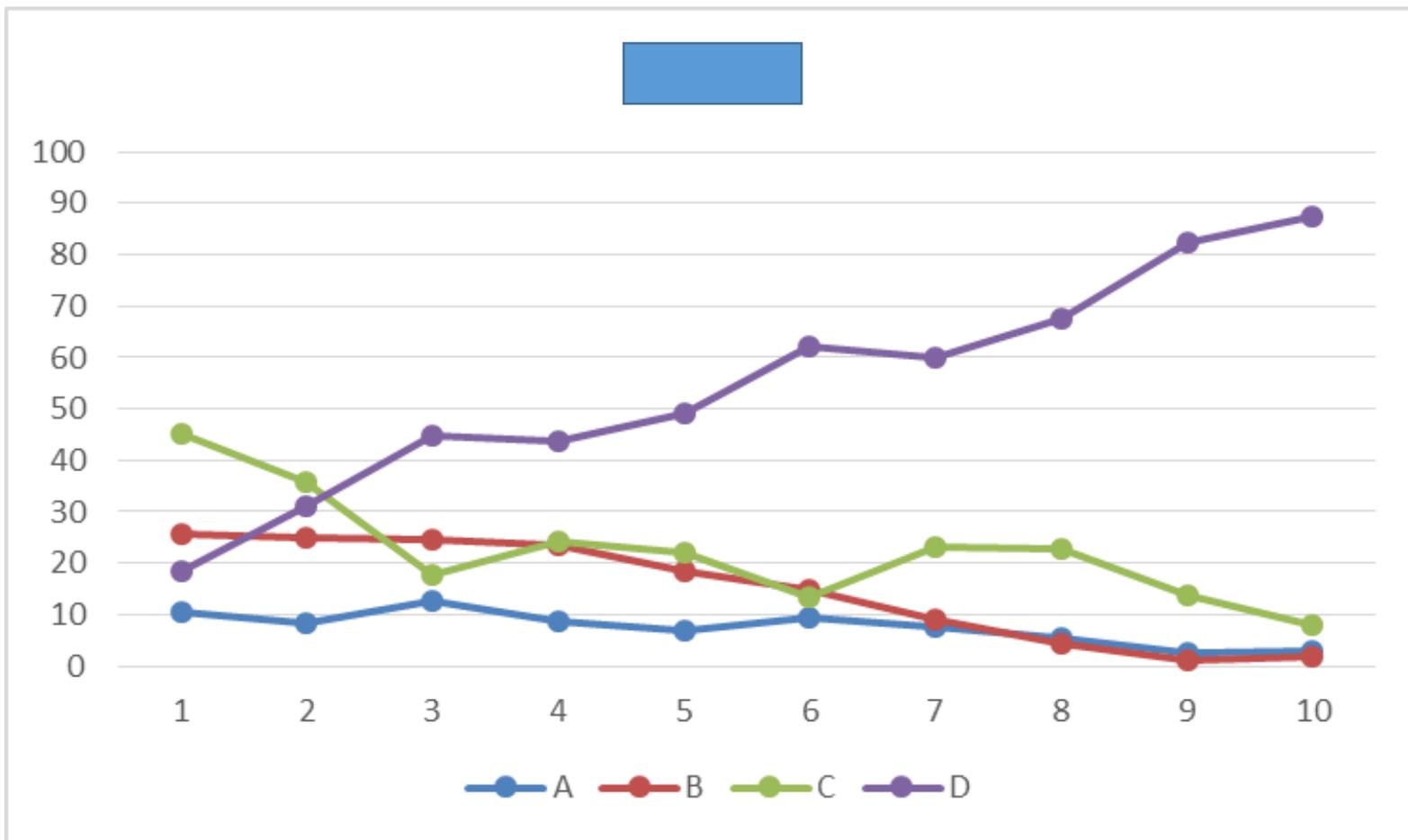
- 「4つ目の空欄に入る語を答える、というリスニングセクションパート2は、大変に難しいように思えます」
- →ワーキングメモリに負担をかけることによって、本当の英語力(の差)をあぶり出すようにしています。実際に大学生にやってもらったデータに基づいて、やさしい問題から難しい問題までをとりそろえています。すべての問題がすべての学生にとって「大変難しい」ということはないと思われれます。

パート別の正答率のデータ

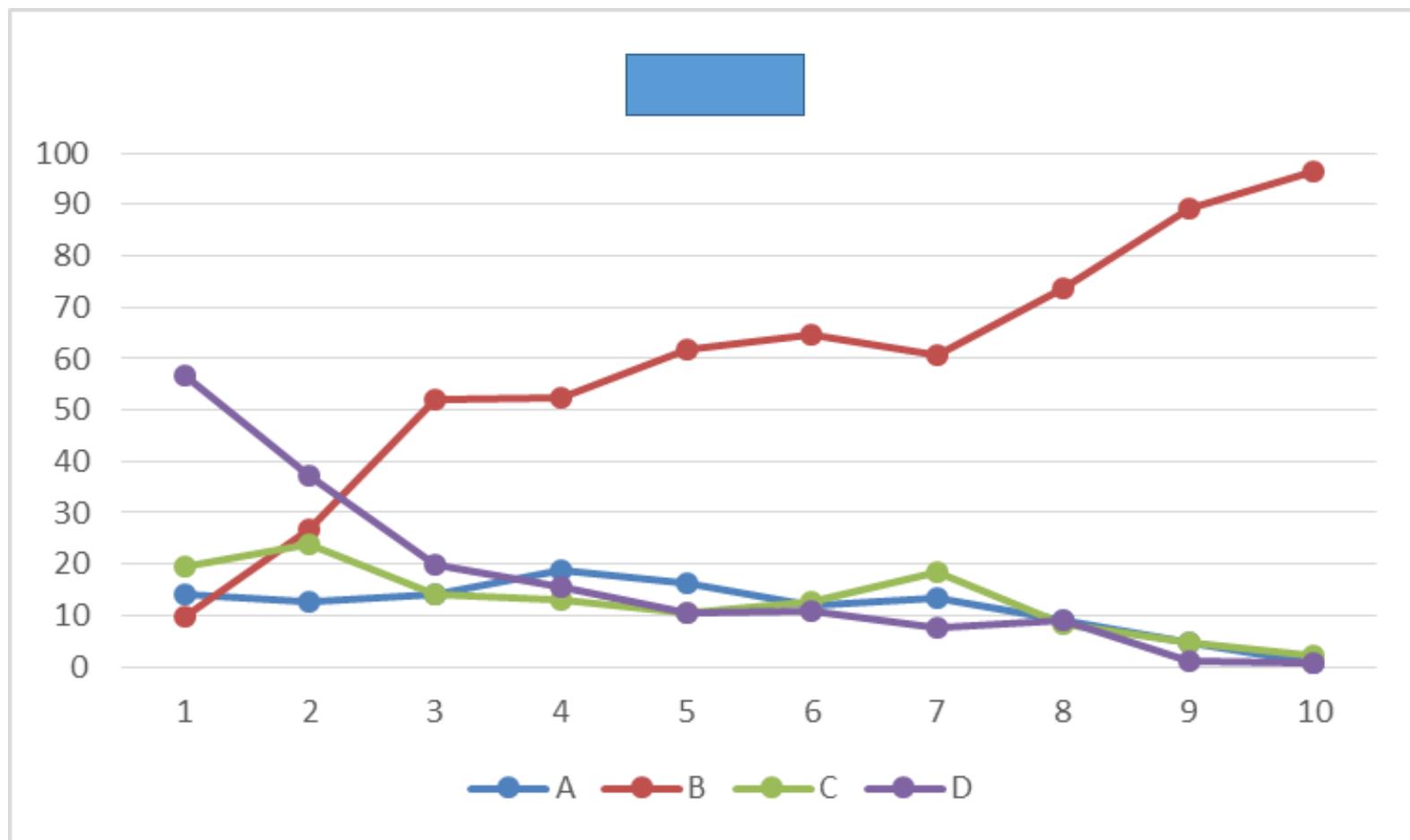
- L1: 58% L2: 51% L3: 45%
- R1: 73% R2: 61% R3: 59%
- テスト全体で約 58%



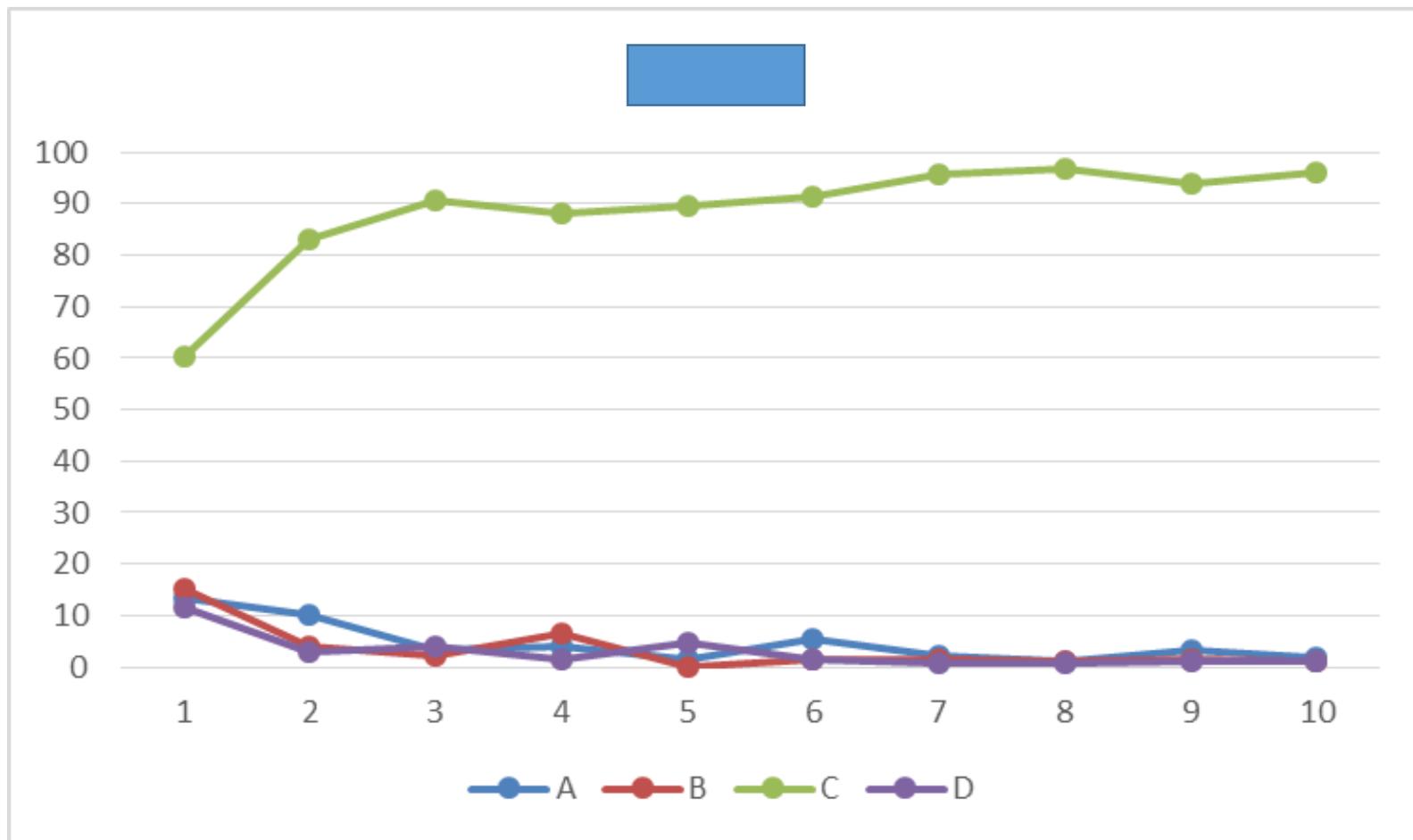
レベル別L2正答率(全体正答率 54%)



レベル別L2正答率(全体正答率 63%)



レベル別L2正答率(全体正答率 89%)



結論

- リスニングセクションパート2は、英語力の個人差をあぶり出すという意図で、4つめを空欄にしています。
- 数え間違いによる誤答は出ない仕組みになっています。
- 平均正答率データ(L2=51%)から見て、L2が難し過ぎることはありません。易しい項目から難しい項目まで、バラエティを持たせています。
- レベル別の正答率グラフを見ても、学力のない学生をさらに細分化(大変にない学生、かなりない学生、まあまあない学生)するのに役立っています。

ご参考

- 静 哲人 (2015). VELC Test フォームAの選択肢特性分析.大東文化大学語学教育研究所創設30周年記念フォーラム. 97-115.
- Shizuka, T. (2015.8). Examining the Performance of Multiple-choice 1-blank Partial Dictation Items. 外国語教育メディア学会 (LET) 第55回 (2015年度) 全国研究大会

引用文献

- Bailey, K. M. (1998) *Learning about language assessment: Dilemmas, dicisions, and directions*. New York: Heinle & Heinle.
- Cohen, A. D. (1994) *Assessing language ability in the classroom*. (2nd ed.). Boston, MA: Heinle & Heinle.
- Hughes, A. (2003) *Testing for language teachers*. (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University Press.
- Oller, J.W., Jr. (1979) *Language tests at school*. London: Longman.
- Stansfield, C. W. (1985) A history of dictation in foreign language teaching and testing. *Modern Language Journal*, 69, 121-128.
- 根岸雅史(1993)『テストの作り方』 研究社.
- 若林俊輔・根岸雅史(1993)『無責任なテストが落ちこぼれを作る』 大修館書店.